

日 本 家 政 学 会
被 服 構 成 学 部 会 誌

第 34 号

平成 25 年 3 月

目 次

部会長ごあいさつ	1
平成 24 年度 被服構成学部会 総会	3
平成 24 年度 被服構成学部会 夏期セミナー	
プログラム	4
講演 1 「アパレルのマーケティングと商品開発」	5
講演 2 「アパレル教育と企業の連携について日米の比較」	6
講演 3 「若手パタンナー育成プロジェクト “ホルス” の試み」	7
部会員報告 1 「イギリスセントマーチンにおける被服教育」	8
部会員報告 2 「国際学会における Design Exhibition」	8
見学会「オンワード総合研究所 研究・研修施設」	9
見学会「シルク博物館と人形の家」	9
夏期セミナーに参加して	10
平成 23 年度 研究例会報告	11
平成 24 年度 研究例会報告	14
特集 「人体と衣服の形態計測よもやま話」	16
第 13 回全国中学生創造ものづくり教育フェア報告	20
関連学会短信	
日本衣服学会	21
The International Textile and Apparel Association (ITAA)	22
平成 24 年度 研究動向（修士論文テーマ・科学研究費補助金研究課題）	23
会務報告	25
平成 23 年度 被服構成学部会 夏期セミナー収支報告	27
貸借対照表	28
平成 23 年度 被服構成学部会 収支計算書	29
平成 24 年度 被服構成学部会 収支予算書	30
お知らせ	31
ご案内	32
被服構成学部会 規約・申し合わせ	33
平成 24・25 年度役員	36
入会申込書および変更届、退会届	37

部会長ごあいさつ

(一般社団法人) 日本家政学会被服構成学部会

部会長 鳴海多恵子

東日本大震災から2年がたち、災害の余波に一抹の不安を感じながらも被災地復興に向けて国民が一丸となって取り組んだ一年でした。本部会の活動に際しましては運営委員をはじめとする部会員の皆様方のご支援とご協力をいただき、無事に予定の事業を遂行することができました。ありがとうございました。

平成24年度の夏期セミナーは、日本家政学会の助成を受けて「グローバルな視点から学ぶアパレル教育と企業の動向」と題して8月31日(金)、9月1日(土)にオンワード総合研究所 研修センターで開催いたしました。産学双方から講師をお招きし、たくさんの参加者のもと、これからの被服構成学の方角性について研鑽を積むことができました。教育貢献の活動としては、昨年3月に本部会が刊行しました「楽しくスクールソーイング」を全国の中学校、高等学校の家庭科研究会などの代表者や理事の先生方を中心に贈呈いたしました。家庭科の授業で役立てていただいているものと思います。また、「中学生創造ものづくりフェア」への協力も引き続き行い、審査の中心的役割を担うと共に、奨励賞と部会賞の授与、および会場内での「体験コーナー」における小物作りの指導も行いました。

平成25年度は、「アパレルに生かす人体計測の取り組み」(予定)と題して8月29(木)、30日(金)に倉敷ファッションセンターで開催します。JIS衣料サイズが大幅に改正されてから約20年が経過しましたが、その後に行われた調査は同一の定義で計測されていない部位があるため、日本人の体格の経年変化の比較検討ができず衣料サイズの改正およびアパレル設計に反映され難い現状があります。日本のアパレルの国際競争力を高め、質の高い衣服生産を支援するためには、アパレル設計のための人体計測データベースを構築し、公開していくことが不可欠であるとの観点からこのテーマを設定いたしました。これに先駆け、昨年10月には大塚美智子副会長を研究代表者として三次元計測と伝統的手計測との互換性を明らかにし、国際比較を可能とするデータベースの基盤をつくり、あわせて日本人の三次元人体標準サイズモデルの基盤を構築することを目的とした全国規模の人体計測実施に関して、科学研究費補助金 基盤研究Aを申請いたしました。この課題は採択の有無にかかわらず、本部会の専門性において社会的責務として取り組むべきものと考えております。実施される際には皆様のご協力をお願い申し上げる次第です。5月18日(土)、19日(日)の日本家政学会大会では部会総会を開催しますとともに、日本家政学会助成 被服構成学部会特別企画講演会「化粧の変遷 女性の美しさと共に(仮題)」(講師 資生堂 富川 栄氏)を実施いたします。たくさんの方々のご参集をお待ちしています。被服構成学の研究と教育の活性化を目指す仲間が集い、研鑽の場として、さらに親好の場として魅力ある組織に発展するよう、皆様のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

平成 24 年度 被服構成学部会 総会

日時：平成 24 年 5 月 12 日（土）

会場：大阪市立大学 814 教室

平成 24 年度被服構成学部会総会は、森由紀副部会長の司会により下記のとおり進行した。

総会次第

- | | |
|---------------------------|-------|
| 1. 開会の辞 | 森由紀 |
| 2. 部会長挨拶 | 鳴海多恵子 |
| 3. 議長選出 | 阿部栄子 |
| 4. 議事 | |
| (1) 平成 23 年度事業報告 | 原田妙子 |
| (2) 平成 23 年度会計報告 | |
| 1. 平成 23 年度収支決算報告 | 磯崎明美 |
| 2. 平成 23 年度夏期セミナー会計報告 | 森由紀 |
| 3. 平成 23 年度貸借対照表 | 磯崎明美 |
| (3) 平成 23 年度会計監査報告 | 大村知子 |
| (4) 平成 24 年度事業計画（案） | 原田妙子 |
| (5) 平成 24 年度夏期セミナーについて（案） | 磯崎明美 |
| (6) 平成 24 年度予算（案）について | 田中早苗 |
| (7) 部会規約の改正（案）について | 鳴海多恵子 |
| (8) その他 | 鳴海多恵子 |
| 5. 議長解任 | |
| 6. 閉会の辞 | 森由紀 |

上記の議事について審議し、承認された。

平成 24 年度 被服構成学部会夏期セミナー

「グローバルな視点から学ぶアパレル教育と企業の動向」

期 日：8月31日（金），9月1日（土）

場 所：オンワード総合研究所 研修センター（横浜市都筑区牛久保3-9-3）

プログラム

8月31日（金）	
13:00～13:10	開会の辞
13:10～14:40	講演1「アパレルのマーケティングと商品開発」 株式会社オンワード樫山 PR部PR課 課長 黒部 和夫氏
14:40～15:20	見学 オンワード研究・研修施設
15:20～15:30	（休憩）
15:30～16:15	部会員報告1 「イギリスセントマーティンにおける被服教育」 東京家政大学 鈴木 由子氏
16:15～17:00	部会員報告2 「国際学会におけるDesign Exhibition」 元東京田中短期大学 小田巻 淑子氏
16:15～17:00	（休憩および移動）
18:00～19:30	懇親会 （センター内レストラン）
9月1日（土）	
9:30～11:00	講演2「アパレル教育と企業の連携について日米の比較」 ハワイ大学 ミナコ・マッカーシー氏
11:05～11:50	講演3「若手パターンメーカー育成プロジェクト“Horus（ホルス）の試み”」 東レACS株式会社 業務企画室 製品企画グループリーダー 久保 忠博氏
11:50～11:55	閉会の辞
11:55～13:30	（自由移動時間）
13:30～15:30	見学 シルク博物館 常設展・ミニ展示（田島比呂子作品） 横浜人形の家 企画展 人形たちの家（ドールハウスの世界）

講演1 「アパレルのマーケティングと商品開発」

ファッション業界全体俯瞰とデティール総括

株式会社オンワード樫山 PR 部 PR 課 黒部 和夫 氏

ファッション業界では著名な黒部和夫氏は、学生時代に『JJ』『POPEYE』など雑誌社のアルバイトをしているうちに、実際に物がどのようにして流通するのか知りたくて(株) オンワード樫山に入社された。営業を経験後、希望されていたメンズ企画部門を一貫して歩まれ、2002 年から PR や宣伝を担当されている。ハマトラブームの演出、業界新聞等への“おしゃれ”の連載、『電気に頼らない涼しい生活』(河出書房新社)の出版など、服飾に関する深い知識と豊富な経験をお持ちの方である。また、日本流行色協会、日本アパレルファッション産業協会などの団体役員をつとめられ、教育関係では多くの大学でご講演されている。

ファッションという世界は非常に広く、業界全体を鳥の目で語れる立場の人はいないということであるが、鳥の目からみた業界俯瞰と、アパレルはどのように物作りが行われているのか、虫の目のデティールの視点から、「ファッション業界全体俯瞰」「アパレルの組織と機能」「情報の収集・分析」について、ご講演いただいた。

ファッション業界は、川上(繊維)、川中(アパレル、製造卸業)、川下(小売)に例えられるが、川下の小売には大きな変化がある。売上が伸びている業態としてセレクトショップやSPAがあり、以前には考えられないようなところが売り場になっている。駅ナカ、空港、パーキングエリアなど利便性や人が集まるところが、新しい流通経路として注目されている。また、マスコミとその媒体である業界紙(繊研新聞、日経新聞、WWD ジャパン)やファッション雑誌の重要性、マスコミを取り巻く人々(スタイリスト、ライター、ファッション評論家)や広告代理店、プレスの仕事内容、教育関係ではファッション専門学校と IFI ファッションビジネススクールについて紹介していただいた。

「アパレルの組織と機能」に関しては、企画、営業、生産、物流、宣伝・PR・広報、品質管理、お客様相談室を取り上げて、事業の主体となる企画においてこの15年で新しく加わった仕事にVMD(ビジュアルマーチャンダイザー)があること、営業の最大の仕事は場所取りと販売スタッフの管理であること、最近では海外物流が重要になっていることなど、解説していただいた。

いつも重要であると思われることに情報があり、以下のような情報の収集・分析の5原則を述べられた。
①情報のT字作戦。(情報を広く集め、これだと思ったところを深掘りする) ②情報は大きい物から小さい物へ。(大きなトレンドを見逃さないようにする) ③情報は自ら発信する者に集まる。④情報は常に現場にある。現場百回。⑤情報ネットワークの構築。(異業種でも何でもよい) また、ファッション情報の形成の仕方として、一番早く決定されるのは「カラー」の2年前であり、「素材」は1年前に決定され、パリのプルミエールヴィジョン、紳士服素材ではミラノウニカが有名である。「製品」は半年前に決定され、レディースはパリコレクションが影響力をもち、メンズはイタリアのフィレンツェとミラノでトレンドがつくられる。トレンド情報の分析は大きいものから小さいもの絞っていき、1. テーマ 2. カラー 3. パターン(柄) 4. 素材 5. アイテム 6. スタイリング 7. デザイン 8. デティール 9. 仕様 10. 付属まで分析が行われる。

貴重なお話を拝聴させていただき、ファッション業界とその現状について理解を深めることができた。字数の都合でキーワードやその説明を一部割愛しているが、教育研究の場に参考にさせていただきたい内容であった。

(記録 服部由美子)

講演2「アパレル教育と企業の連携について日米の比較」

ハワイ州立大学マノア校 アパレルプロダクトデザイン&マーチャンダイジング部
マッカーシー美奈子 氏

アパレルに真摯に向き合い、日本とアメリカという異なる文化の中で、それぞれのよさを見出し融合させているマッカーシー美奈子氏から私たちが学んだことは多かったと感じる。それは、これまでの多彩な経験や実績に裏付けられた説得力のある氏のお話と、どのような環境においてもご自身のアパレルへの思いを具現化するチャンスを見出せる積極性が、私たちをも引き付けたからであろう。

氏は、文化服装学院で学び、日本のアパレル企業に勤務された後、アメリカサウスカロライナ州でのアパレル業界とのかかわりを経て、ハワイへの移住を期にハワイ大学アパレルデザイン部へ入学した。大学卒業後に、水着パタンナーとして地元の会社に就職、それらの実績をふまえて現在の教職に至っておられる。それらの過程で経験したこと、文化や習慣の異なる異国で働く際の不安やとまどい、歩を止めず前向きに与えられた環境とかかわっていくことによって得られた自信、そして両国の違いを認めながらも、バランスをとって順応している現在の状況について、視覚情報も豊かに、会場との一体感をもってお話し下さった。

まず、アメリカのファッション都市の紹介、ハワイのアパレル業界の特徴について紹介された。ハワイでは、多くの若者が、全米各地のファッション都市での就職を目指す。一方で、ファッション都市としての東京に興味はもつものの、好きなデザイナーとして日本人は一人も挙がらないという実態を残念に思うとのことであった。アメリカにおけるアパレル教育の場は、専門学校、短期大学、4年制大学であり、4年制大学においては、経済分野、ビジネス及びマーケティング等を学び、アパレル分野との関連を追究していくという選択によって、将来の方向性を広範囲に求めていくことも可能である。また、氏が勤務するハワイ大学アパレルデザイン部では、アジアの服装史等を学んだり、ハワイアンプリントのテクニック及び伝統素材のKapa等、ハワイの文化を学んだりすることもカリキュラム上強調されている。このように可能性と魅力のあるカリキュラムによって、アパレルを勉強し、その業界を目指す若者が多い反面、関連の経験が乏しく、基本的な技能が身に付いていないことが原因で、途中で挫折する若者も少なくない。時代の流れの中で希薄になりつつあるこれらの基本的な学習を、義務教育や大学前教育において重視することの必要性が語られた。

アメリカのアパレル業界の現場を生き生きと紹介していただく中で、特に中小企業や個人企業では、その素朴さや合理性を重視する雰囲気の中にも、「肩書きに留まることなく幅広く仕事を請け負う」ことが求められるとのことであった。そして、それが会社の誇りや経営に直接に結びついていること、個人の職業キャリアの基盤としての自尊心にもつながっていることが想像できた。

「アメリカでアパレル教育を受け、仕事をする私の基盤は、諸外国に劣らない水準の高いアパレル業界をもつ日本で得た知識と経験」「日本以外のアパレル業界、現地での実社会にみる特徴の中に、グローバリズされた共通項を見だし自らバランスをとる道を模索することが重要」という氏のまとめの言葉の中に、これまでの継続的な努力の上に築き上げた自信と、今後のアパレル教育へのこだわりを感じることができた。このような実績をもつ氏のような逸材が、教育の場に活かされるようなシステムづくりが、我が国にも早急に求められるであろう。しかしながらそれは、氏が強調するように、義務教育における裾野の広い人材育成と柔軟な学力のとらえ方を前提として成しえることであると感じた。

(記録 鈴木明子)

講演3 「若手パタンナー育成プロジェクト“ホルス”の試み」

日本のアパレル技術継承のために

東レACS株式会社 業務企画室営業企画管理グループ主任部員 久保忠博 氏

久保氏のアパレル技術と宝の山の人脈で、次世代若手パターンメーカー育成プロジェクトの“裏方&親分”として試みられた経過と意気込みを、ひとつのキーワードにまとめてわかりやすく説明していただいた。

1. “ホルス”発足のきっかけ — 久保氏の着眼点 アミコファッションズとハトホルの存続について大野氏と後藤氏との話し合い、またプロのパターンメーカー育成機関危機に関しての後藤氏&関充氏からの継続の打診があり、ハトホルを継ぐために「何を？誰に？なんのために？」日本アパレルの技術継承の重要性を考え、若手が知識習得を望んでいる事実をもとに、パターンメーカーの可能性追求をホルスで実現しようとした。

2. 日本アパレルの環境 日本の衣服産業は何度もの景気の底を乗り越えるため、企業同士が協力しながら復活していった経験が、一部の企業を除いていわゆる敵との協力体制として浸透している。久保氏自身は、アメリカのTC2に対抗した通産省中小企業事業団の自動縫製システムプロジェクトに参加し、多分野の方々との交流があったことが“ホルス”発足を担うことに繋がった。今の若手には他企業との交流機会が殆どない問題点がある。

3. ホルスの発足と4. ホルスの運営 “ホルス”とは、日本の高齢者が持つ世界に通用するアパレルパターン技術を若手（20-30歳代）に伝授するため久保氏&関充氏が発足した、プロのための学習を提供する場。目的（運営委員によるまとめ）としては、日本のパターン技術を伝承する為、自発的に行動することにより、あらゆる繋がりを深め、知識や技術、情報の発信源となり、日本のパターンメーカーの地位とアパレル力を向上させる団体になること。会則はセミナー要旨集を参照されたい。現在までのホルス発足の経緯は、運営委員として口コミで集めた20名程度の若手集団を作り、メンバーが知りたい技術を抽出し、その目的にあった講師を事務局（東レ）が探し交渉している。実際に若手の意外に持っているアナログネットワークでの運営ができています。また、ホルスの具体的な運営方法として、会費は一人3000円程度の参加費用（学生は半額）、参加費の領収書は個人宛のみ（自発性を重視）、収入の約50%を講師に残りを運営費用とする。安い会場の確保に努力されていた。

5. ホルスセミナーの実施例 <http://www.toray-acsc.com/works/horus.html> にて動画紹介。セミナー1~6の大野氏、関氏、沼田氏、佐藤氏、垣田氏、小倉氏、およびプロジェクト（運営委員のみ）からモデル&モデリスト5組を選び、シャツのデザイン、仮縫い、縫製、仕上げのそれぞれの工程を3回に分けて研究し合う。その他、Webを使った技術継承・Facebookを利用したホルス情報公開、ホルス全国展開の計画紹介など。

6. ホルスのこれから 今後の実施予定として、1. セミナー形式→自分の仕事との関連を意識、2. 実践・実習形式→自らの技術アップのため、3. 関連企業見学→生地、縫製、仕上げ等の前後工程の工場見学、セミナーが紹介され、2011年5月発足以来、現在まで参加者は延べ600名とのこと。

久保氏から若手ホルスメンバーへ、自ら企画・実施できる運営力、学んで実際の作業に活かせる分析力、世代を越えたコミュニケーション力、ヒューマンネットワークを拡大できる力が期待された。ホルスを活用することで世界一のパターンメーカーとなりアジアでのパターンメーカーの地位を日本が確保するため、日本独特の過去の財産の活用・審美眼を養う環境整備・高度なパターン技術の継承、本当にいいものを作ろうとする姿勢と努力がこれからの日本には必要であり、常に新しい流れに適応した若者を育てる環境作り&方法論の確立が重要であり、学生に対する教育についても今一度、皆さんに考えて頂きたい、との熱い講演であった。（記録 増田智恵）

部会員報告 1

「イギリスセントマーチンにおける被服教育」

東京家政大学 鈴木由子氏

先生は、2000年8月から2年間、イギリス・ロンドンにあるセントラル セント マーチンズ カレッジ オブ アート アンド デザイン(CSM)の、BA ファッションデザインのメンズウェアコースで学びました。CSM BA コース(3年)には、先生が編入されたメンズウェアコースの他ウィメンズウェアコースがあり、4年コースにはニットウェアコースなど多くのコースがあります。そして、CSMの卒業生には、今は亡きアレキサンダー・マックイーンがいます。

服の造形教育の最初は原型ですが、CSMでは、寸法から入るのではなく形から入り、学生が自分で希望の形に応用しているそうです。それらをメンズ・ウィメンズコースそれぞれの例をあげて説明してくださいました。

次に、メンズ・ウィメンズコースのシラバスについてお話があり、両コースに共通しているメインスタディに含まれる多くの分野と、各学年1回のカルチュラルスタディ(3年生は卒業論文)について説明されました。その中のメインスタディ・プロジェクトの種類と課題などの一覧表を見てみると、リサーチ&デザインから始まり、ポートフォリオと共に実物プレゼンテーションなどがあり、非常に高度でハードな学習をこなされていることを知りました。学習中にチューターから「なぜ日本人は同じ絵を描くのか」と言われ、ずい分戸惑いながら画風を変えていった先生のイラストが印象的でした。

最後に、ファイナル コレクションに向けての先生の取り組みやクラスメイトの作品など、多くの写真を見せていただき、CSM教育の一環を垣間見ることができました。日本とは大きく異なる被服教育の方法の違いや厳しさ、すばらしさがお話の中から伝わってきました。

(記録 小山京子)

部会員報告 2

「国際学会における Design Exhibition」

元東京田中短大 小田巻淑子氏

小田巻先生は、ITAA のデザインをはじめ海外の Design Exhibition に応募されてきている。今回は ITAA の例を中心にご講演いただいた。

まず、日本では、学会主催の Design Exhibition は、あまり見られないが、米国では ITAA だけでなく AATCC などでも行われており、盛況であるという。米国の大学においては被服教育の目的が職能教育であり、企業も Design Exhibition を人材育成や確保の場と捉え、積極的に奨学金などの支援をおこなっている。学生にとっても、企業に自己アピールする重要な場となっている。また、論文賞を受賞した大学院生が Design 部門でも受賞するなど、総合的な視点で即戦力となる人材を育成している点が米国被服系大学の強みと盛況の要因があると考察された。

実際の応募の手続きも具体的にお話いただいた。デザインの要旨と写真を求められるだけでなく、版權の使用承諾書と審査料金を添えて申し込む。厳しい審査の結果、アクセプトは3割程度だという。審査結果は、審査項目毎の得点と審査員のコメントを添えて応募者に送られるが、客観的な審査と応募者への開示は、次回の励みにもなり、被服教育全体の質の向上に大きく貢献しているとされた。

アクセプトされた作品は、Design Exhibition Catalog 用の写真や要旨を提出するとともに、年次大会に出席すること、期間内に作品を届けることが求められる。作品は衣類とみなされ関税などの問題もあってトラブルが生じやすいことなどもお話くださった。

最後に実際に参加することで得られるものも多く、次代を担う日本の若者に是非、活躍してほしいと結ばれた。多くの経験を積んで来られた先生から、学会の主催する Design Exhibition の価値と参加する意義を教えていただいた講演であった。

(記録 渡邊敬子)

見学会

「オンワード総合研究所 研究・研修施設」 元共立女子大学（非） 大久保美雪

オンワード総合研究所は、人材開発センターと技術開発センターの2部門から成り立っており、参加者は2グループに分かれて見学をさせていただいた。＜人材開発センター＞研修や会議をはじめ、仲間のパーティや会合などに使用できる研修室がさまざまなサイズあり、レストランや宿泊施設・プール（宿泊者専用）が併設されていて立派な施設であった。

＜技術開発センター＞オンワード先端技術研究所と品質管理室の見学をさせていただいた。

オンワード先端技術研究所は、オンワードだけでなく東レや帝人、JUKI など素材や副資材メーカー、ミシンメーカーなど16社の共同で運営されているとのことだった。研究所内には縫製工場に設置してあるミシンが所狭しと並んでおり、プレス機や洗濯機（ドライ、ウェット）など生地やサンプルのテストができる設備も整っていた。新素材の開発ができたときや、工場内で問題が発生したときなどに素材にあった条件の検討・検証を行っているとのことだった。

品質管理室では、主に消費者からのクレーム品についての検証が行われていた。持ち込まれたクレームについて、事象がおこった条件を可能な限り忠実に再現し、原因究明を行いユーザーと生産ラインへのフィードバックを行っているそうだ。年間600件ほどを処理しているとのことだった。

素材が多様化しているなかで、消費者はクリーニングを過信しているとお話があり、納得して聞かせていただいた。また自分自身では既製のクレームを申し出たことがないので、クレームとして持ち込んでくれる消費者がいることは衣料品の質の向上にはよいことだと再認識することができた。

「シルク博物館と人形の家」

熊本大学 雙田珠己

シルク博物館は、神奈川県、横浜市及び関係業界の協力によって建設されたシルクセンター国際貿易観光会館の重要な一事業として、昭和34年3月に同会館内に開設されました。世界でも数少ない絹に関する博物館ということで、興味をもたれた方も多かったのか、今回の見学会には約30名の先生方が参加されました。

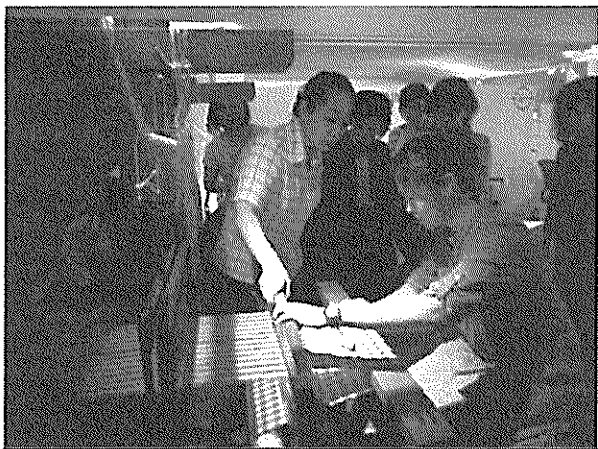
博物館では、学芸員の大野美也子氏に館内を案内していただき、シルクに関する歴史をたどりながら、さまざまな種類の繭と、それによって作られる織物を見学しました。また、館内には蚕が繭を作る「回転まぶし」や、繭から糸を取り出す道具など、養蚕や製糸に関する珍しい道具が数多く展示されており、詳しい説明を聞きながら興味深く拝見しました。

蚕糸業は、過去には日本経済を担う基幹産業でしたが、現在の生産量は最盛期の約1/1000まで激減しているということでした。また、蚕糸業を営む農家は、2010年の資料で約700件と報告されており、これも最盛期の約1/2000にすぎないとのことでした。時代の流れを感じられた方も多かったのではないのでしょうか。

一方、蚕の存在は、私たちの生活の中でも次第に陰が薄くなっているようで、理科の授業で蚕を飼育する機会も少なくなりました。蚕を見たことがない若い人も、年々増えているそうです。博物館では、玄関前に植えられた桑の葉を餌にして家蚕を飼育し、実物を展示していました。また、会場内には、機織りや繭から生糸を取り出す体験コーナーが設けられており、誰でも実際に機械に触れることができました。横浜という土地柄もあり、来館者の1～2割は外国人ということなので、楽しみながら日本の文化を理解してもらうよい機会になると思います。絹という繊維がもつ神秘性に、改めて感動する人も多いことでしょう。

博物館の2階には、絹を使った衣装が数多く展示されていますが、今回は特別展示として、田島比呂子氏の友禪も併せて鑑賞することができました。田島氏は重要無形文化財「友禪」の保持者(人間国宝)に認定された染色家です。

蚕から最高級の芸術品まで、絹のすばらしさを堪能したひとときでした、



【人形の家】

ご都合のつく方が自由に参加する形式にしました。数人の方がグループで見学されました。

夏期セミナーに参加して

京都女子大学大学院家政学研究科
生活造形学専攻1年 尾上望

今回、初めて被服構成学部会夏期セミナーに参加させていただきました。今回のセミナーのテーマが「グローバルな視点から学ぶアパレル教育と企業の動向」ということで、今後より重要になるテーマだと感じ、とても興味深く拝聴させていただきました。鈴木先生、マッカーシー先生のお話で、海外の大学の授業内容を知り、世界のアパレル市場を意識した授業を実践しているということや、学生がどれほどストイックにアパレルを学んでいるかということを知ることができました。また、小田巻先生が、日本のアパレル(教育)の国際化の必要性や若い世代に活躍してほしいというお話をされたのが印象的でした。一層グローバル化が進んでいく中で、被服を学ぶ学生として、広い視野を持ち学んでいきたいと思いました。企業からの講師の先生方のお話で印象的だったのは「若手」に関する話です。オンワードの黒田さんが、どのような人材を求めているかという質問に対し、自分の目的をはっきり持っている人と答えていらっしゃいましたが、なかなか自分の目的や目標を明確に答えられる人は少ないだろうと感じました。東レ ACS の久保さんのお話では、若手パタンナー育成プロジェクト“Horus”の取組についてお話をされました。私自身、関西ホルスに参加させていただいておりますが、毎回様々な先生の技術を生で見ることができ、とても勉強になっています。また、同世代の人がどのようにアパレルを考えて真剣に取り組んでいるかということを知ることができ、とてもいい刺激になっています。

今回のセミナーへの参加は、私にとってとても意味深いものとなりました。今後も、様々な勉強会に積極的に参加させていただきたいと思います。

平成 23 年度研究例会報告

「大学と中・高校の被服製作学習の発展に向けて」Part II 一新指導要領の実施に向けてー

和洋女子大学 布施谷節子

日時：平成 24 年 3 月 24 日（土）13：00～16：30

場所：和洋女子大学 西館 2-4, 2-6

プログラム

講演：「家庭用ミシンの近況について」

(株)ブラザー販売 前田吉徳

シンポジウム

「新指導要領の実施に向けて、被服製作学習をどう展開するか」

コーディネーター 大村知子(静岡大学名誉教授)

1. 中学校における被服製作学習について

清水弘美（山梨県教育庁）

2. 高校における被服製作学習について

真田知恵子(県立千葉東高校)

3. 大学における被服製作学習の課題について

葛西美樹（東北女子大学）

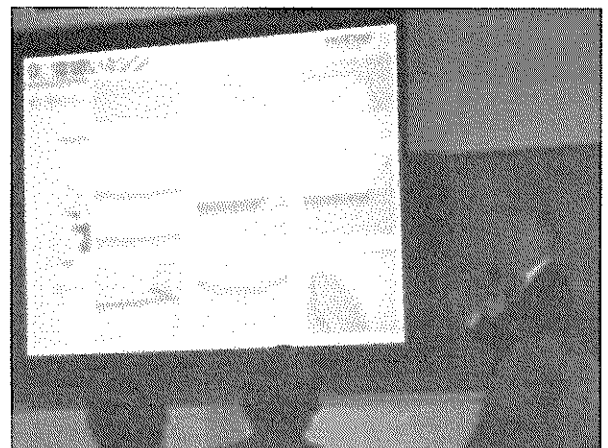
今回を Part II と銘打ったのは、やはり和洋女子大学で行われた平成 21 年度の研究例会で、「大学と中・高校の被服製作学習の充実に向けて」と題して行われたのを受けてのことである。平成 22 年度当初の事業計画として、平成 23 年 3 月に今回の研究例会をとり上げてあったが、東日本大震災の直後ということもあり急きょ開催を中止した経緯があった。そこで、昨年は、この企画を現部会長の鳴海多恵子先生が実行委員長として実施して下さった。

開催と同時に、出来上がったばかりの被服構成学部会監修による「楽しくスクールソーイング」の本の展示販売、この本の中に掲載した作品や掲載できなかった部会員から寄せられた作品の実物と展示が行われた。さらに、ブラザーミシンの最新の刺しゅうミシンの実演と展示などが行われ、盛会のうちに終了した。参加者は非会員を含めて 57 名であった。

(株)ブラザー販売 前田吉徳氏の講演「家庭用ミシンの近況について」より

家庭用ミシンの市場規模は年々減少しているが、ミシンの価値は従来の「生活の道具」としての価値から、「愛情表現」や「趣味や生活を楽しむため」、「自己表現」としての価値が高くなってきた。従って、ミシンは 20 代後半から 30 代にかけて、結婚、出産、子育て（入学・入園）の節目の時期と 50 代後半から 60 代にかけて自分の時間ができた時の二つの需要期に購入されることが多くなった。これに関連して、ミシンにどんな機能を求めているかにより、刺しゅう機能、実用機能、小型、職業用などに特化したミシンが求められるようになった。

前田氏は、部会員にとっては既に常識と考えていたものの、実は本当のところはよくわかっていなかったようなミシン針のこと、ミシン目のこと、水平釜と垂直釜の違い、布と針と糸の関係など、長年の経験に基づき、大変分かりやすく説明して下さった。最新のコンピューター制御による刺しゅうミシンなど、講演会場外で実演されたこともあり、技術革新に参加者一同目を見張った。



シンポジウム：「新指導要領の実施に向けて、被服製作学習をどう展開するか」

1. 清水弘美氏（山梨県教育庁）による

「中学校における被服製作学習について」より

被服構成学部会は、全国中学生創造ものづくり教育フェアに審査委員長を出し、被服構成学部会賞として賞状・賞品を提供し、運営に関わっている。清水氏も長年にわたり被服製作部門の審査員を務めている。参加生徒の熱心な取り組みの様子をスライドで紹介してくださった。

さらに、平成24年4月から新学習指導要領に準拠した新教科書に移行するのを踏まえて、製作題材が衣服よりもエコバック、ブックカバー、ペットボトルカバー、ティッシュケース、ランチョンマットなど、布を用いて生活を豊かにする具体的な物を計画し、製作することになるという説明がなされた。

一方、小学校5、6年生の調査ではボタン付け、布の裁断、ミシンの直線縫いなどは生徒のほとんどができると答えているものの、家庭科専科の教員が12%しかいないこと、担任が家庭科を担当している比率は70%であり、しかも担任になった期間だけ家庭科を教えているという実態である。中学校でもミシンは二人に1台しか当たらないこと、ミシンの機種がさまざまであり、機種ごとに説明をしなければならぬ、製作教材もキット教材を使うことがほとんどであるなどの現状が報告された。



2. 真田知恵子氏（県立千葉東高校）による

「高校における被服製作学習について」より

千葉県内の進学校では家庭基礎2単位であり、被服製作を削る場合がある。時間数の減少は生徒が被服製作に携わるチャンスを奪っている。真田氏の高校では家庭基礎を3単位として、増単1で家庭基礎を実施しているものの実質1年間で54時間に過ぎない。被服製作に割ける時間は9時間程度であり、エプロンと巾着を製作している。教材は教材会社が出しているプリント済みの糸つきセット教材である。調理実習で使用に耐えるものを作ろうという目標を掲げている。

小・中学校で何を実習していたかについてはハーフパンツ、ウォールポケット、作っていないという回答が多い。発達に見合った教材とは何かを悩みつつ、手縫いの基礎、ミシンの扱い、直線縫い、曲線縫いをさせた後に、作品に仕上げていく。3回もエプロンを製作した生徒と初めてミシンを扱う生徒と同じ教材でよい悩む。しかし、限られた時間の中で、好きなものを作って良いとも言えない。

製作終了後の生徒の感想では、達成感からか好評である。講義よりも自分で体験して苦労した方が記憶に残るし、よく考える。この点からは、被服製作実習は必要と考えるが、時間が削減される中、厳しく難しい状況に追い込まれている。実習時間の不足は昼休みに補修をするなどして対応している。

技能の定着を図るために、発達段階に適した教材とは何か、基礎基本とは何か、定着率の悪さをどうしたらよいかなど悩みは尽きない。



3. 葛西美樹氏（東北女子大学）による 「大学における被服製作学習の課題について」 より

大学生の現状としては、習熟度に個人差が大きい。大学以前の被服製作実習の経験は約 90%である。小・中学校ではミシンを使った教材が多いが、高校ではミシンを使用する教材は少なく、大学ではミシンの操作を忘れるか使えない状態になっている。

大学における実習の困難な点は、洋裁ではベルト付け、衿、ファスナー付け、和裁では衿付け、袖付けなどがあげられる。縫製以外では、洋裁では型紙の作成や試着補正、採寸、和裁では仕上げや身頃のしるしつけがあげられた。製作終了後に、今後は一人で製作できると回答した学生は 50%に過ぎなかった。

苦手意識の早期克服と意欲の向上を図るために、指導方法の改善が必要である。テキストや標本を理解すること自体が困難な学生にとって、これだけでは自学自習の場面では不十分である。そこでマルチメディア教材の開発を行った。被服実習の中でも重要な基礎縫いを中心に、右利きでも左利きでも学生にとってわかりやすい副教材の製作を目指した。インターネット配信で、タブレット端末や携帯端末での活用を考えた。

教員養成校として、教師の被服離れを解消するために、早期にミシンの実技試験を課し、技能を再確認しながら確実にしていくことが必要となる。また、地域の小・中学校の家庭科作品展などを積極的に見学することは、被服教育の現状に触れ、教師になった時の実技指導力について考えるきっかけとなる。

大学においては、高校までの被服製作学習の実態を担当教員が把握し、それぞれの技能に合わせて学習できるカリキュラムの見直しが必要である。

シンポジウムのフロアからは、開発したメディア教材の公開を望む声が挙がった。

被服構成学部会監修「楽しくスクールソーイング」 の刊行について

平成 21 年度の研究例会において、部会として中学・高校の現場の先生や生徒に使ってもらえるような被服製作教材を掲載した本を出版したいという運営委員会からの提案を受けて、企画委員を中心に準備を進め、教材案を部会員に公募したところ、多くの作品が寄せられた。これらの作品の中から選択した作品について、製作の仕方の手順や図解だけでなく、授業で製作することを想定して、製作時間や時間ごとの製作の流れや、生徒の自己評価のチェック項目など、すぐに現場で活用しやすいように紙面を構成した。

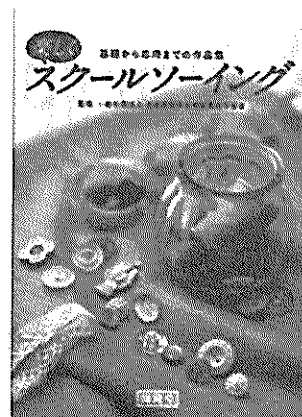
さらに手縫い、ミシン縫いなどの基礎的な技法についてわかりやすい写真とイラストで示した。

学習指導要領に、環境保全や伝統文化の内容が加えられたことに合わせて、リメイク、エコロジーや伝統の知恵と工夫を込めた作品を紹介し、いくつかの作品については学習指導案を掲載した。

布の表情を表す教材としてピンワークを掲載した。高校の現場で実際に教材として取り上げることは少ないかもしれないが、生徒が布の魅力を感じることを期待して、美しい作品を紹介した。

部会員には昨年春に配送し、各県や政令指定都市の中学・高校の研究会や教育委員会にも寄贈した。被服構成学部会の活動が広く認知され、さらに教育の現場で活用されることを願っている。

本書は一般書店では販売していないが、開隆堂のホームページから注文ができる。部会員におかれては、近隣の中学・高校の家庭科教員に紹介していただきたい。



平成 24 年度研究例会報告

埼玉大学 川端博子

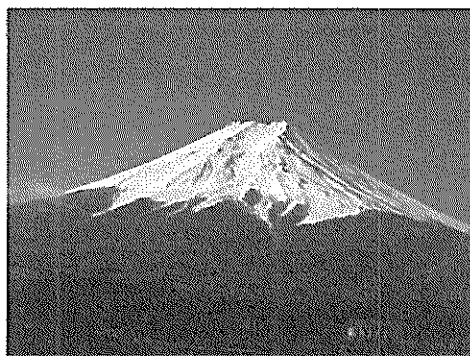
平成 25 年 3 月 11 日、山梨方面へのバス見学会を開催しました。4 月の運営委員会で例会担当となったもののアイデアもなく思案に暮れていましたが、大塚副部長よりアドバイスを頂戴し、何とか役目を果たすことができました。年度末の忙しい時期にもかかわらず、一般 21 名、学生 13 名の参加がありました。以下行程に沿って報告します。

8:30 新宿西口出発。朝早い集合のため、広島、兵庫から参加の先生方は前泊で、静岡の大村先生は始発の新幹線で駆けつけてくださいました。中型から大型バスに変更したため、ゆったり過ごすことができません。車中ではおしゃべりの花が咲きました。好天に恵まれ、車窓からの雄大な富士山は、素晴らしいの一言に尽きます。

11:30 久保田一竹美術館の見学。美術館の好意で DVD を借りることができたので、車中にて一竹辻が花染めの技法と一竹の予備知識を得ておくことができました。大黒柱 16 本を用いた日本古来の組上げ技法と西洋のログハウスの技法を組み合わせたピラミッド形のギャラリーには、1~2 年をかけて完成させた力作のきもの 35 点が展示されていました。一般の絞りとはまったく異なる凹凸・襷・色彩は、渋さと豪華が同居する独特の美を醸し出しています。古き良きものに触れるをイメージして選んだ当地ですが、斬新で未知なる美に出会ったとい

うのが感想です。作品鑑賞の後には自然を生かした庭園をのんびりと散策してから、次の目的地に向かいました。

12:15 「南瓜ほうとう」で昼食。河口湖畔にはバスで乗り入れられる大型店があり、34 名分の料理が短時間に用意されて驚きました。ほうとうが初めての人にとっては、珍しい体験となったと思います。お腹も膨らみ・体も温まり、次の目的地に向かいました。



13:30 富士急行三ツ峠駅前にバス駐車。糸の音会は、西桂織物工業組合の指導のもと、地域で協力して研究・工夫を続け、付加価値の高い繊維製品を生産しておられます。今回、3 つの会社より協力を得て製造工程と製品について説明を頂きました。

榎田商店は、甲斐絹の技術を応用した生地織りと傘の製造を手掛ける老舗です。高級感のあるジャガード織の傘は日本の高い技術を象徴する品で、デパートなど



一竹美術館庭園にて



名物ほうとうをいただく

で販売されているそうです。写真は、色柄と素材の異なる生地を組み合わせた遊び心のあるモザイク傘で、雨の日の外出も楽しくなりそうです。山崎織物ではネクタイ製造を主としストールやマフラーも生産されています。有名ブランドからの注文を受けているそうです。趣向を凝らした柄・素材のネクタイが所狭しに掛けられていました。武藤株式会社では、時間の都合で織り工場しか見ることができませんでした。カシミア、シルク、その他の天然繊維混紡のストール・マフラーを見せていただきましたが、ガーゼのように柔らかなタッチのカシミア・絹混のストールは、高級そのものです。

各会社見学の後には格安での販売があり、宝探しに時間が潰れ、質疑応答の場が持てなかったのは大きな反省点であります。

16:30 現地出発。 18:30 新宿西口解散。

今回の研究例会は、被服を軸とし、人・自然との出会いにまとめられるかもしれません。忙しい日々ですが、バスに揺られての遠出は憩いの時になったのではないかと思います。



横田社長による傘の説明

関係者各位の都合で決定に至った当日は、東日本大震災2年を迎える日にあたります。日々の生活が大混乱に陥り、当部会においても研究例会が1年延期となったのは記憶に新しいところです。被災地の復興を願いつつ、見学会を開催できる幸せを感じています。

本企画の開催にあたり武藤英之様、横田則夫様、松本聡様ほか関係者の皆さまより、さまざまなお力添えをいただきましたこと感謝します。

見学会アンケート

(一般19名、学生12名の回答)

1. 参加した理由 (MA)	企画に興味 21	周りに誘われた 20	他 0		
2. 企画を何で知ったか (MA)	学会誌 0	HP 1	部会メール 15	人からの紹介 18	
3. 感想 (バスの利用)	良い 28	やや良い 3	どちらでもない 0	あまり良くない 0	良くない 0
4. 感想 (美術館見学)	良い 23	やや良い 7	どちらでもない 1	あまり良くない 0	良くない 0
5. 感想 (会社見学)	良い 27	やや良い 4	どちらでもない 0	あまり良くない 0	良くない 0
6. その他感想の記述 (抜粋)	○大変親切に説明してくださり(3件)、糸の音グループとして今後ますます発展する可能性を感じ、地域の力を感じた。 ○一人で来ることが難しい所へ出掛け、職人の方達の仕事が見学できて充実していた。 ○時にはこのような見学研修企画はよいと思う。(5件) ×最後が少し駆け足になったのが残念であった。(4件) ○値段の差と品質の良さについて改めて感じるが多かった。 ○現場に密着して製品の仕上がりまで見ることができて興味深かった。 ○布を織る工程がおもしろかった。織機を見ることができてよかった。(5件) ○また見学に行きたいし、体験などもできるとよい。 ○傘、ストールなど普段見れない工程を見せてもらえた。(3件) 染色についても知りたかった○産業が1か所で完結する地域は全国でも少なく、そこを見学できてよい体験となった。 ○パリの生地見本帳が印象深い。(2件) ○日本の織物工場がこんなに頑張っている姿を見て安心した。				

はじめに

研究の足跡を記す機会を得ましたので70年代後半から現在までの人体と衣服の形態計測についてのお話をさせていただきます。振り返りますと、人体計測は人体の寸法情報そのものが必要であった時代から、シルエットなど2次元の人体形状計測の時代へ、そして3次元計測機で得た計測値を直接コンピュータに保存して形状を再現できる時代へと発展してきました。研究は機器の開発に伴っていろいろなアプローチが可能となりましたが、私自身は昔の泥臭い実験の中で得たものも多かったように思います。以下に着心地の良い衣服設計にむけた研究の足跡を辿りたいと思います。

1. 人体計測

'70年代から'80年代にかけて京女大ではマルチン計測法に基づく人体計測が盛んに行われていました。プロジェクトチームを組織して、被験者と場所が確保できれば計測器を携えて計測してまわりました。

既製衣料等の寸法基準および呼び寸法統一のために1978年から1981年にかけて乳幼児から高齢者にいたる日本人の全国規模の人体計測が実施されましたが、計測には京都地区の計測グループとして参画しました。私達はその後3年間、乳幼児の計測を継続し、生後0カ月から12カ月児の乳児1,019名の計測値を分析し、月齢別の平均値と標準偏差、月齢間の平均値の差の検定ならびに26項目の類似度を報告¹⁾しました。また、生後0カ月から3歳6カ月児の乳幼児の全国データ(男児2,919名、女児2,773名)と京都データ(男児1,394名、女児1,231名)計8,317名の計測値の分析結果も報告²⁾しました。計測項目は、全国が26項目でしたが、京都では乳児44項目、1歳児以上は64項目でした。成人女子については、既製服の適合度を計測値に基づいて検討³⁾する方法を提案しました。横断的計測で得た人体の寸法情報は、衣服設計のための基礎データとして、また既製服サイズの適合度の検討に有用でした。

しかし、成長に伴う変化や、妊婦の経時的な寸法変化を捉えるには縦断的な計測が求められます。小学生期における身体各部位の成長過程⁴⁾は、京女大付属小に1973年に入学した1年生が卒業するまでの6年間、経年的に計測した結果が報告されています。また、京都市内の産婦人科病院に検診に訪れた妊婦520名を経時的に計測し、延べ1,000例の分析結果を報告⁵⁾しました。マルチン計測法に基づく人体計測は計測技術に練磨した研究者が必要ですが、どこにでも出向いて計測できる利点があります。

しかし、マルチン計測のデータだけでは体型をイメージし難いことから、開発されたシルエット機を導入し、シルエット法を併用するようになりました。シルエットからみた体型の類似性⁶⁾は、1981年から1983年にわたり女子学生407名についてシルエット写真(立位静止姿勢時の前面視と右側面視)の投影長15項目をノギスで、角度6項目を分度器で測定し、マルチン計測値10項目と合わせて報告しました。また、成人女子のシルエット分析と年齢の特徴を表すシルエットの評価⁷⁾は、19歳から82歳までの成人女子689名のシルエット写真50項目と体重の計51項目で、各年齢グループのシルエットの特徴を示し、その代表のシルエットで体つきを評価しています。

人体のシルエットがもつ情報量は大きいので、シルエットをコンピュータ上で再構築することができれば、体形モデルを用いたデザインとその評価に応用することができます。人体形状シルエットの特徴点抽出と特徴点に基づく日本人成人女子の体形分析⁸⁾では、18歳から58歳までの成人女子428名の正面と側面の写真をコンピュータに取り込み、2次元体形モデルを用いて173の節点データを求め、さらに体形特徴を的確に記述する40の特徴点を提案しました。この40の特徴点を利用して、1976年から1996年にわたり4歳から17歳までを経年的に撮影した正面と側面の写真資料

(41名, 延べ465例)を分析して, 成長過程の変化の類型化⁹⁾を行いました. コンピュータ上で人体形状が分析できるようになると, 体形分析の結果に基づいて人体形状を平均化して表示できますので, 体形の直接的な解釈と理解が容易となりました. 今は3次元計測値から人体形状モデルが開発されています. 人体3次元モデルに基づく体形特徴の抽出と表示¹⁰⁾では, 3次元で体形特徴を理解しながらコンピュータ画面上に表示するためのいくつかの手法を示しています. 情報量の多さは戸惑うことが多くなりましたが, 体形特徴の抽出と簡便な体形特徴表示の開発は, 衣服設計にとって有用になったと思います.

2. 体表面展開から基本型紙の導出を目指して

'80年代前半は体表面展開図から基本型紙を導出する方法を試行錯誤した時代でもあります. 衣服設計は, 静止時の人体形状と寸法情報に, 人の動きをゆとり量として加える必要があります. 人体のもっている運動特性や法則性を見出し, 衣服の適応性を高めることを目指して, 下肢動作による下半身体表面¹¹⁾と, 上肢挙動による上半身及び上腕部の体表面¹²⁾のレプリカで動作姿勢別に検討しました. レプリカは延伸加工したパラフィルムと粘着テープで採取しましたが, 直接録で平面展開できる利点がありました. 基準線の寸法変化, 基準線内に対角線を引いてできる三角形の面積変化, 三角形に分割された部位の形状変化を求めました. 局部的に伸縮する部位や, 平面的形状が曲面に変化する部位, 曲面的な形状が平面に変化する部位などを捉えることができました. 直接法で体表面を展開し, 曲率と向きあった研究は, その後, 間接法で実験した3次元人体形状計測値からの体表面特徴の抽出及びそれに基づく基本型紙の導出¹³⁾に役立ちました. しかし, 人体と衣服との間の支持部やゆとり量の課題は残りました.

3. 着衣時の衣服形態について

衣服と人体との関係の解明には, 人体形状と衣服の着衣形状の双方向から歩みよることが有効と思われます. 光学的な手法で断面計測が出来るようになると, 間接法で着衣形状が採取できるようになりました. そ

こで赤外線やレーザ光線でスカートの横断面を採取し, スカートの計測法と評価法¹⁴⁾を提案するとともに, ギャザースカートの形態把握¹⁵⁾を行いました. また上半身衣についても着衣基体との間隙量に注目して報告¹⁶⁾をしました.

ところで, 動作適合性を得るためには静的な計測に加えて動的な計測が求められます. そこで, '90年代には人が着衣して動いた時の揺動性を可視化して捉える試みを行いました. 図1に, 動作に伴う衣服の揺動性把握の方法とセミタイトスカートの揺動軌跡¹⁷⁾の実験で採取した写真を示します. これは, 暗室でブラックライトを照射し, 足ふみを10回行う間, カメラのシャッターを開放にして撮影しています. グレーのフラノ地で作成した65cm丈のセミタイトスカートには, ヒップラインと前後中心線を基準として10cm升目状に白穴糸が縫い込んであります. 足の蹴りあげに伴い, 前面では裾が持ち上がる様子を, 後面では裾が前方に引かれて臀部が浮き出る様子を捉えています. 図2は, 同様のセミタイトスカートで, 裾に豆球とボタン電池を取り付けて暗室で撮影した写真です. 下肢の動きに伴い, スカートのそれぞれの部位で独自の動きをします. 暗室でカメラのシャッターを開放にして撮影した写真は, スカートの揺動を理解するのに役立ちました. しかし, 画面ごとに実寸換算して座標値を追跡するのは困難でしたから後に, 運動画像解析システムを導入してコンピュータで解析できるようにしました¹⁸⁾.

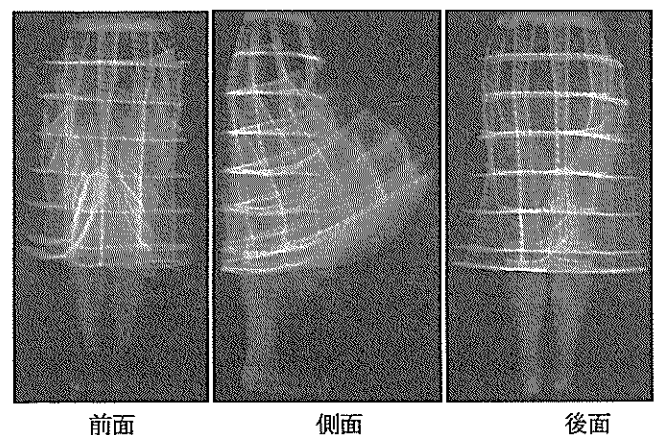


図1 セミタイトスカート前後側面の揺動軌跡の可視化

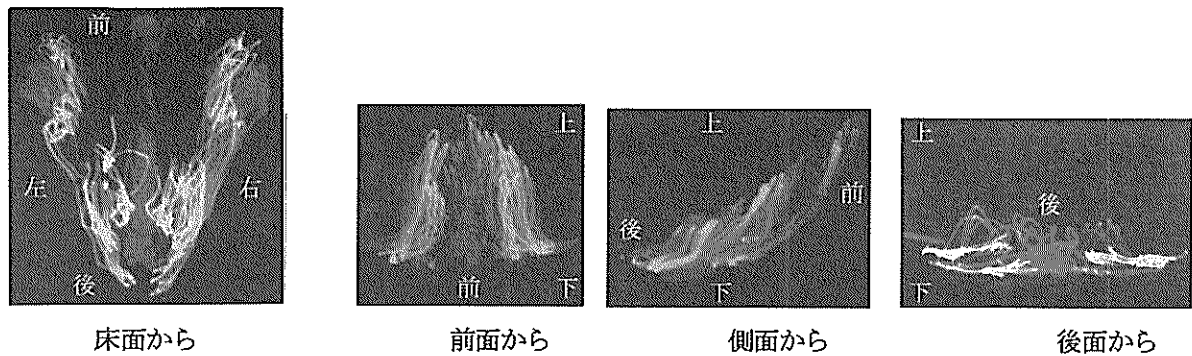


図2 足ふみ10回時のセミタイトスカートの裾の揺動(4方向から撮影)

着衣は人体の動きに伴って揺動し、人体と衣服との関係を変化させます。運動機能性を高めるためには、人体の変位や皮膚の伸縮に応じた適切なゆとり量の配分を検討する必要があります。ゆとり量は、着衣と人体との間に生ずる立体的な空間と考えられますが、常に不安定な状態にあり、複雑な人体の動きによって衣服が揺動する時、空間の量も変化します。そこで、着衣のずれに関する研究¹⁹⁻²⁰⁾では、糸挿入法によって、体幹部68ヶ所の着衣のずれを同時に測定し、部位別に異なるずれ量からゆとり量を検討する試みを行いました。設計寸法は人体寸法になにほどこかの数値を加減したのですが、設計する衣服の目的に応じて、人体の動きをゆとり量として入れることになりますので、基本型紙の導出には解決しなければならない課題があるように思います。

4. ブラジャーと乳房との関係の解明

研究生活最終章の約10年余りはブラジャーと乳房との関係の解明を研究課題としました。乳房の計測について夏期セミナーで報告²¹⁾させていただきましたが、静止時はブラジャーのカップ内で乳房が偏位します²²⁾ので、形を変えて上手く納まります。静止時だけであれば着用シミュレーションが可能です²³⁾。しかし、運動時に乳房が振動を繰り返しますので、カップ内で衣服圧が変動し、ブラジャーと乳房がズレます²⁴⁾。この要因の1つとして、乳房の柔らかさがあります。乳房の柔らかさは、乳房の硬さ指標として押し込みの力から求める方法を提案²⁵⁾しました。柔らかい乳房の方が揺れやすいので、ブラジャーを着用して硬い乳房の

状態にすると揺れ難くなります。また乳房の動きにはパターンがあり、歩行時には上方への振動が大ですが、走行時は横方向にも大きくなり8の字を描くようになります。走行時の乳房振動については脚の動きと同期させて計測し、周波数解析の結果を示しました²⁶⁾。乳房の運動機構とブラジャーの構造との間に介在する諸関係や法則性などを分析し、運動機能性の高いブラジャーの設計につながればと思います。

最近では乳がん術後女性がかかえるブラジャーと補整パッドの問題を解決するための研究²⁷⁻²⁹⁾を行いました。乳がん術後女性のために着心地の良いブラジャーと補整パッドが早期に開発されることを望んでいます。

5. おわりに

被服構成学会の夏期セミナーで刺激を受け、研究のアイデアやツールを得て、がむしやらに突き進んだ若い頃を思い出しました。今までご指導頂いた被服構成学会の多くの先生方に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 岡部和代, 銭谷八栄子, 山名信子: 乳児の体型の特徴からみた衣服設計, 京都女子大学被服学雑誌, 30, 25-34(1985)
- 2) 岡部和代, 銭谷八栄子, 山名信子: 乳幼児の衣服寸法に関する研究, 京都女子大学被服学雑誌, 34, 69-78(1989)
- 3) 銭谷八栄子, 岡部和代, 中野慎子, 山名信子: 既製服適合度の分析に関する研究, 京都女子大学被服学雑誌, 28, 39-46(1983)

- 4) 山名信子:小学生期における身体各部位の成長過程について, 京都府立医科大学雑誌, 94, 1061-1073 (1985)
- 5) 山名信子, 岡部和代, 中野慎子, 銭谷八栄子, 斉田つゆ子:妊婦体型の妊婦経過に伴う変化, 人間工学, 20, 171-178 (1984)
- 6) 山名信子, 岡部和代, 中野慎子:シルエットからみた体型の類似性, 家政誌, 39, 1187-1195 (1988)
- 7) 岡部和代, 山名信子, 山本和枝:成人女子のシルエット分析と年齢の特徴を表わすシルエットの評価, 繊維消誌, 35, 491-498 (1994)
- 8) 岡部和代, 黒川隆夫:人体形状シルエットの特徴点抽出と特徴点に基づく日本人成人女子の体形分析, 人間工学, 41, 11-16 (2005)
- 9) 岡部和代, 黒川隆夫:成長期の日本人女子の人体シルエット分析と体形変化の類型化, 人間工学, 41, 17-23 (2005)
- 10) 森直子, 森下あおい, 西岡靖代, 岡部和代, 黒川隆夫:人体3次元モデルに基づく体形特徴の抽出と表示, 京都工芸繊維大学地域共同研究センター研究成果報告書, 9, 21-26 (2000)
- 11) 山名信子, 銭谷八栄子, 岡部和代, 内山葉子:下肢動作による下半身体表面の変化, 京都女子大学被服学雑誌, 26, 6-14 (1981)
- 12) 山名信子, 銭谷八栄子, 岡部和代, 斉田つゆ子:上肢挙動による上半身及び上腕部の体表面変化, 京都女子大学被服学雑誌, 27, 1-9 (1982)
- 13) 西岡靖代, 岡部和代, 黒川隆夫:3次元人体形状計測値からの体表面特徴の抽出及びそれに基づく基本型紙の導出, 日本人間工学会関西支部大会講演論文集, 193-196 (1999)
- 14) 山名信子, 岡部和代, 中野慎子, 銭谷八栄子, 三平和雄:赤外線形態描画器によるスカートの計測法と評価法, 家政誌, 37, 877-883 (1986)
- 15) 岡部和代, 山名信子, 中野慎子, 銭谷八栄子, 三平和雄:ギャザースカートの形態把握に関する研究, 家政誌, 38, 743-749 (1987)
- 16) 岡部和代, 杉生次代, 山名信子, 中野慎子:上半身衣の着衣形態に関する研究, 家政誌, 43, 429-435 (1992)
- 17) 岡部和代, 山名信子, 銭谷八栄子, 中野慎子:動作に伴う衣服の揺動性把握の方法とセミタイトスカートの揺動軌跡, 衣服誌, 39, 21-30 (1995)
- 18) 岡部和代, 杉本次代:スカートの揺動性に関する研究, 京都女子大学生生活造形, 43, 49-56 (1998)
- 19) 山名信子, 岡部和代, 銭谷八栄子, 斉田つゆ子:着衣のずれに関する研究—ワンピースについて—, 家政誌, 35, 547-553 (1984)
- 20) 岡部和代:着衣のずれに関する研究, 日本家政学会被服構成学部会夏期セミナー要旨集, 7-15 (1985)
- 21) 岡部和代:乳房の計測—乳房とブラジャーとの関係—, 日本家政学会被服構成学部会夏期セミナー要旨集, 40-43 (2004)
- 22) 岡部和代, 黒川隆夫:若年女子ブラジャー着用時の乳房の3次元偏位特性, 繊維消誌, 45, 416-424 (2004)
- 23) 大神晃, 岡部和代, 黒川隆夫:人体3次元形状モデルを用いたブラジャー着用に伴う形状変化の分析と着用シミュレーション, 京都工芸繊維大学地域共同研究センター研究成果報告書, 10, 15-20 (2002)
- 24) 岡部和代, 黒川隆夫:スポーツブラジャー設計のための走行中の乳房振動, 衣服圧変動, ブラジャーと乳房のズレの相互関係の解明, デサントスポーツ科学, 27, 75-85 (2006)
- 25) 岡部和代, 黒川隆夫:ブラジャー着用時と非着用時の運動中の乳房振動特性, 家政誌, 54, 731-738 (2003)
- 26) 岡部和代, 黒川隆夫:走行中のブラジャー着用時の乳房振動とずれの特性, 家政誌, 56, 379-388 (2005)
- 27) 藤上明子, 岡部和代, 谷田貝麻美子:胸部形状に左右差のある乳がん術後女性のブラジャーと補整パッド装着時の衣服圧, 繊維消誌, 52, 624-632 (2011)
- 28) 藤上明子, 岡部和代, 谷田貝麻美子:胸部形状に左右差のある乳がん術後女性のブラジャーフレームのずれ, 繊維消誌, 53, 461-469 (2012)
- 29) 岡部和代, 諸岡晴美, 谷田貝麻美子:胸部形状に左右差のある乳がん術後女性の補整パッド装着時の着衣感, 衣服圧, 重心について, 繊維消誌, 54, 68-75 (2013)

「第13回全国中学生創造ものづくり教育フェア」報告

東京学芸大学 鳴海多恵子

第13回は、平成25年1月26日・27日に、昨年と同様に東京都江東区の新木場タワーで開催された。この大会は、中学校の技術・家庭科の先生方により準備・運営がされている。技術科関係は「木工チャレンジコンテスト」「創造アイデアロボットコンテスト」「パソコン入力コンクール」があり、家庭科関係は「豊かな生活を創るアイデアバッグ」コンクールと「あなたのためのおべんとう」コンクールがある。いずれも全国各地の予選を勝ち抜いた中学生が会場で製作や競技を行い、実力を競うものである。この他、授業や課外活動などで製作した作品のコンクールも行われている。本部会では「豊かな生活を創るアイデアバッグ」コンクールに審査委員長として協力するほか「被服構成学部会賞」の賞状と副賞を授与している。また、「作品コンクール」は「奨励賞」を2件授与している。

今年の「豊かな生活を創るアイデアバッグ」コンクールには16名が参加したが、被服構成学部会賞は、茨城県北茨城市立中郷中学校2年生 鈴木 楓さんに決定した(写真)。鈴木さんは、昨年もこの大会に挑戦したものの地区大会にも出場できず、今年は全国大会出場を目標に繰り返し、繰り返し練習した、とのことだった。作品は「勉強にも遊びにも使える！ 丈夫でかわいいバッグ」とネーミングされ、A4サイズのファイルが入る大きさのトートバッグである。目的別のポケットがたくさんついているほか、飾りとしてつけているリボンもサイドバッグになる、という工夫がされていた。中郷中学校は毎年のように全国大会に選手を送り出す名門校である。指導されている家庭科教員の意欲と指導力に敬意を表したいと思う。

受賞した選手に限らず、出場した選手達の創意工夫や技術水準が高いのはもちろんのこと、手際の良さも感動するほどの見事さである。現代の被服製作学習が授業時間の縮減のなかで、指導者と生徒双方にとって時間的お

よび技術的に負担が大きいといわれているが、コンクールに出場した生徒達は中学生が潜在的に持っている能力の無限さを感じさせてくれる。中学生の日常生活におけるものづくり体験や技能・知識が低いからこそ、学校教育での指導が重要であることを新ためて認識させられた。

審査を通して、技術面に関して、多少の問題点も見いだされた。選手達はできるだけ速く作業を進めたい思いから、ミシン縫製においてほとんどしつけをせず、また、まち針の使用も少ない。ミシンを一端止めて、ミシン針を布に刺した状態で布端を整え、また縫い進めるという縫い方をしている。この方法でほとんど問題無く作業は進められてはいるが、布のずれを気にするためか、両手をミシン針に極めて近い位置に置く傾向がある。押さえ金に指が触れるほどである。小・中学校の被服製作の授業中にミシン針で指を刺す事故が少なくないと聞いているが、その原因の一つがこのようにまち針を使わないことに関連しているように感じた。中学校段階では、ミシンを使用する際には安全面はもちろん、縫製中の布のずれを防ぐために、また、今後のいせ込みなどの技術理解のためにもまち針の使用は不可欠であると考える。

今回も大会実行委員会から体験コーナーへの出展を依頼され、学芸大の学生2名の協力のもとで、来場した生徒や保護者、教員などに、手縫いで「ポケット2つのポケットティッシュホルダー」の製作指導を実施した。



被服構成学部会賞 受賞作品

関連学会短信

〈日本衣服学会〉

埼玉大学 川端博子

日本衣服学会は設立 64 年の歴史を有し、会員数は被服構成学部会を少し大きくした程度の小規模な学会である。設立当時は被服衛生学が核となっていたと聞いているが、現在では『広く衣服全般にかかる諸問題を総合的視野に立って研究を行う学術団体』と記載されているように、学会で出会う研究内容は実に幅広く、被服学の多様性を感じる。

学会行事でお会するのはつらつ大先輩から比べれば、私はひよこのような存在である。それでも年齢を重ねてくると、研究においてもその他の仕事においても、興味本位の体当たりはできなくなり、全般を見渡しつつ最適なポジションを考えた取り組み姿勢に傾くような気がする。被服学を見渡せるという点で、衣服学会の参加で得られるものは貴重である。

平成 24 年度の年次大会は 11 月 10 日に京都華頂大学で行われた。演題は 14 件で、研究手法も、物理・化学的実験、文献調査、質問紙調査の分析、画像分析など多種多様である。（紙面の都合もあり内容分類が難しいので日本衣服学会の HP を参照されたい。）発表形式においてはポスター発表が新たに導入されたので、作品展示などの参加もしやすくなると思う。

基調講演は、京都服飾文化研究財団キュレーター周防珠実氏による「シャルル=フレデリック・ウォルトー 20 世紀モードへの礎石」である。パリのメゾンの礎を築いた氏の考え・手腕・歴史的背景の紹介は、服飾文化の一研究として、若い人に聞いてもらいたい新鮮で興味深い内容であった。

例年、年次大会は学問の秋、11 月に開催され、関連学会とは異なる時期に設定されており、夏休みの成果報告にはよいタイミングである。（秋は旅行・食欲 etc にもふさわしく、余裕があればいっそう充実したものになる。）25 年度は、信州大学での開催を予定している。

24 年度の一大イベントは、去る 12 月 15 日文化学園大学で開催された科研費研究成果公開講座「ファッションの魅力～おしゃれて輝く～」である。「障がいのあるなしに関わらず、そして若いも若きも快適で楽しく衣服を着ることを可能にする」を目指し、長年研究をなされてこられた、被服学領域から岡田宣子先生と作業療法士の立場から菊池恵美子・石橋仁美先生より、研究内容と活動の紹介があった。午後には、ファッションモデルで大活躍の最中、交通事故に遭遇し車椅子生活者となられた鈴木ひとみ氏の講演に続き、高齢障がい者のファッションショウを手掛けておられる渡辺聡子・大野淑子先生によるショウが開催され、会場は明るく輝いた。休憩時には、11 団体・個人による作品展示ブースが設けられ、工夫を手に取り、着てみることができ、多くの関心が寄せられた。

会のまとめとして、「だれもおしゃれできる社会に向けて」と題したパネルディスカッションがあった。最後に鈴木ひとみ氏より、ようやく衣服の不都合を口にすることができるようになったものの、さまざまな衣服の不都合への改善・情報が集約されておらず、学会にリードしてほしいという要望が寄せられ、学会に対する大きな宿題が出された。



ファッションショウのエンディング

＜2012 年 ITAA 年次大会＞

東京家政大学・相模女子大学・学芸大学(非)

小田 巻 淑子

2012 年 ITAA 年次大会は、11 月 14 日から 11 月 17 日まで、ハワイ州ホノルルの WAIKIKI BEACH

MARRIOTT RESORT & SPA ホテルで開催された。

参加者は 400 余名で、日本からは、元広島大学の林隆子先生、実践女子大学の高部啓子先生、京都女子大学の渡邊敬子先生と学生の尾上のぞみさん、私の 6 名が参加した。繁忙期を避けた為、例年より会期が遅くなったが、おかげでワイキキビーチとダイヤモンドヘッドが一望できる素晴らしい環境のなかで過ごす大会となった。

大会テーマ「No One is an Island」とロゴマークの亀は、かつて無人島だったハワイに、亀の導きでポリネシア人が移住し、現在に至った事を表現したとのことである。実行委員会は、ハワイ独自のアロハの雰囲気を感じてほしいとの配慮から、例年より見学やワークショップを増やした。私達も Hawaiian Craft Workshops を体験する予定であったが、直前に講師の都合で中止となってしまう残念であった。その代わり、リソースセンター会場内に飾られた見事なハワイアンキルトの展示と実演をゆっくり見学できた。偶然、講師のアシスタントが日本人だったおかげで、独特のモチーフや製作方法などデモンストレーションを交えた詳細な説明を聞くことができた。また、オープニングレセプションも屋外ガーデンで開催された。ハワイアンミュージックやショーで始まり、主催者側のムーム着用呼びかけに、多くの参加者が答え、例年になく華やいだ雰囲気の中で大会がスタートした。恒例の Design Exhibition 発表も、黄昏前の屋外プールサイドで開催された。

今回は、特に若い世代の参加が目立った。米国も日本と同様、第一次ベビーブーマー（太平洋戦争後）のリタイアに伴い世代交代が始まっていたが、ここにきて米国では第 2 次ベビーブーマー（朝鮮動乱後）のリタイアが始まったようで、顔なじみの先生方に代わり、

若いパワーの台頭が目立ち、世代交代が順調に進んでいる。その流れを促進すべく、大学院生間の交流組織 ITAA Graduate Liaison の支援、学会運営の簡素化と IT 化、更なる会員のボランティア協力の要請など、学会の刷新も進んでいる。特に、今年からは企業協賛による賞(奨学金)を大幅に増やした。今年からスタートした「Rising Star」賞は、Lucy E.Dunne さん（ミネソタ大学）が、若手のホープとして表彰された。彼女の発表は、わかりやすく言葉の壁を越えて伝わってきた。あらためてプレゼンテーションの重要性を認識させられた。

近年、ITAA はグローバルな学会を目指して、国際的に開かれた企画をしている。12 年度はパリアメリカンアカデミー協賛による BALENCIAGA IN HAWAII と銘打った Design Competition が企画された。以前、Mme GRES のワークショップでお世話になったアカデミー校長の M.Carman とも再会し、作品集をプレゼントされた。また、米国で育った日本人 Mr. Keith Nishida（オレゴン州立大学博士課程、ロゴマークの作者）にも再会した。できれば米国の大学で教職に就きたいと抱負を語ってくれた。ぜひ頑張ってもらいたいと思う。なにしろ、韓国留学生の活躍が目ざましく、卒業生後、米国の大学で教職に就いている例が多いのである。また、昨年から年次大会で ITAA-KSCT（Korean Society of Clothing and Textiles）Joint Symposium も開催されている。最近では、中国はじめアジアからの留学生も増えている。是非、日本から留学生が増え、世界で活躍してほしいと願うものである。

今回、リゾートウェアで有名なハワイのアパレルメーカー Tori Richard 社の President and CEO の Josh Feldman 氏による基調講演と見学があった。Tori Richard 社の製品は、元は日本人が起こしたアロハの会社が始まりである。どこか懐かしいアロハ独特のプリント柄は、今は世界各国で生産されているが、1930 年代後半から 50 年以上にわたり日本で全て生産されていたと聞き、懐かしさの理由が納得できた。

来年の大会は、10 月 15 日から 18 日まで、米国東部ルイジアナ州ニューオールリンズで開催される。

平成 24 年度 研究動向（修士論文テーマ・科学研究費補助金研究課題）

「平成 24 年度修士論文テーマ」

「幼稚園児における手指の巧緻性に関する研究」 山本彩子（指導：鳴海多恵子）東京学芸大学大学院修士課程
家政教育専攻

「平成 24 年度 科学研究費補助金 研究課題」

基盤研究（A）

「無線通信による熱中症予防支援システムの構築と被服環境デザインの最適化」，平成 23 年から 26 年，横浜
国立大学・薩本弥生（研究代表者）

「エコ&ユビキタス対応 3 次元ファッションシステムの開発」，平成 22 年から 24 年，三重大学・増田智恵（研
究代表者）

基盤研究（B）

「オンデマンドファッションを利用したユニバーサルファッションの実現」，平成 23 年から 25 年，京都
女子大学短期大学部・渡邊敬子（研究代表者），実践女子大学・高部啓子（研究分担者），滋賀県立大学・森
下あおい（研究分担者）

基盤研究（C）

「衣服の動作適応筋電図評価ーユニバーサルデザインの視点からー」平成 22 年から 24 年，昭和女子大学・
石垣理子（研究代表者），昭和女子大学・猪又美栄子（研究分担者）

「衣生活の改善による授乳期の女性への支援」，平成 23 年から 25 年，埼玉大学・川端博子（研究代表者）

「生活実践への自己効力感の向上を促す家庭科ものづくり教育の再構築に関する研究」，
平成 22 年から 24 年，広島大学・鈴木明子（研究代表者）

「肢体不自由児・者のズボンの着脱動作解析と自立を助ける修正衣服の開発」，平成 23 年から 25 年，熊本大
学・雙田珠己（研究代表者）

「ユニバーサルデザインに向けた衣服設計用ボディの開発」，平成 23 年から 25 年，実践女子大学・高部啓子
（研究代表者）

「東北の刺し子の文様特性に関する研究」，平成 23 年から 25 年，福島大学・千葉桂子（研究代表者）

「量産衣料用デジタル仮縫い工房」開発のための人体の3次元形状推定システムの検討」，平成23年から25年，大妻女子大学短期大学部・土肥麻佐子（研究代表者），三重大学・増田智恵（研究分担者）

「体形と筋負担を考慮したパーソナルファッションのための基礎的研究」，平成23年から25年，広島大学・村上かおり（研究代表者）

「スタイル画の感性価値を活かした衣服デザインの創造的設計支援システムの開発」，平成23年から25年，滋賀県立大学・森下あおい（研究代表者）

「幼児期の手指の巧緻性の実態と発達」，平成24年から26年，東京学芸大学・鳴海多恵子（研究代表者）

若手研究（B）

「多面体を用いた衣服の縫合後の立体形状予測システムの作成」，平成21年から24年，福岡女子大学・伊藤海織

「布の「しっとり」感に関する素材物性の客観評価」，平成22年から24年，武庫川女子大学短期大学部・末弘由佳理

「健康な高齢者のための外観と安全・機能性を兼ね備えたズボン設計に関する研究」，平成23年から25年，和洋女子大学・柴田優子

（（注）継続研究と部会員の皆様への呼びかけに対してお申し出頂いた分のみを掲載しました。）

会 務 報 告

1. 平成 24 年度会務報告

1) 事業報告

① 総 会

日時：平成 24 年 5 月 12 日（土）

場所：大阪市立大学 814 教室

② 夏期セミナー

「グローバルな視点から学ぶアパレル教育と企業の動向」

日時：平成 24 年 8 月 31 日（金）・9 月 1 日（土）

場所：オンワード総合研究所 研修センター

③ 全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援

日時：平成 24 年 1 月 26 日（土）27 日（日）

場所：新木場タワー

④ 研究例会

「山梨県西桂織物工業組合見学会」

日時：平成 25 年 3 月 11 日（月）

場所：山梨県西桂町

⑤ 部会誌 34 号発行 平成 25 年 3 月 31 日（日）

⑥ ホームページの維持管理

② 第 2 回運営委員会

日時：平成 24 年 5 月 12 日（土）

場所：大阪市立大学 814 教室

(1) 平成 23 年度事業報告について

(2) 平成 23 年度収支決算報告について

(3) 平成 23 年度夏期セミナー収支決算報告について

(4) 平成 23 年貸借対照表について

(5) 平成 23 年度会計監査報告について

(6) 平成 24 年事業計画案について

(7) 平成 24 年度夏期セミナー案について

(8) 平成 24 年度予算案について

(9) 夏期セミナー予算案について

(10) 被服構成学部会規約および申し合わせ改正案について

(11) H24 年度研究例会について

(12) 運営委員のメーリングリストについて

(13) 運営委員名簿について

(14) 部会誌第 34 号編集案について

(15) 被災地支援についての報告

2) 庶務報告

① 第 1 回運営委員会

日時：平成 24 年 4 月 23 日（月）

場所：文化学園大学 A 館 044 教室

(1) 平成 24・25 年度運営委員会の開催について

(2) 総会の準備について

(3) 資産の使途について

(4) 部会規約の改正について

(5) 「楽しいスクールソーイング」の配布について

(6) 被災地支援について

(7) 研究例会について

(8) 会計監査について

③ 第 3 回運営委員会

日時：平成 24 年 8 月 31 日（金）

場所：オンワード総合研究所 小会議室

(1) 平成 24 年度研究例会について

(2) 平成 25 年度夏期セミナーについて

(3) 各係からの報告と問題提起

(4) 名誉会員について

(5) 運営委員会引き継ぎ資料管理について

(6) 部会誌 34 号編集案について

3) 会計報告（次頁以降参照）

2. 平成 25 年度事業計画（案）

① 総会

日時：平成 25 年 5 月 18 日（土）

場所：昭和女子大学

② 日本家政学会大会活性化企画講演会

日時：平成 25 年 5 月 19 日（日）

場所：昭和女子大学

③ 夏期セミナー

日時：平成 25 年 8 月 29 日（木）

8 月 30 日（金）

場所：倉敷ファッションセンター

④ 全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援

日時：平成 26 年 1 月 25 日（土）、26 日（日）

（予定）

場所：新木場センター

⑤ 研究例会 平成 26 年 3 月

⑥ 部会誌 35 号の発行

⑦ ホームページの維持管理

⑧ その他

平成23年度 被服構成学部会 夏期セミナー 収支報告書

◆夏期セミナー

収入の部

費目	予算	決算	備考
参加費	250,000	324,500	会員 5,000円×49名 非会員 7,500円×9名 高校教員 2,000円×2名 学生 2,000円×4名
部会会計より補助費	435,000	450,000	
合 計	685,000	774,500	

支出の部

費目	予算	決算	備考
会場費	50,000	45,286	
講師謝礼	110,000	109,721	徴収税 14,721円を含む
要旨集	100,000	75,600	
印刷代	30,000	3,545	
雑費	20,000	20,475	
会議費	100,000	87,064	
通信・輸送費	20,000	22,580	
交通費	120,000	146,408	徴収税 16,944円を含む
庶務費	20,000	27,541	
ワークショップ費用	50,000	38,440	
人件費	50,000	52,000	
予備費	15,000	28,704	
計	685,000	657,364	

差引残高

774,500-657,364=117,136

◆懇親会

収入の部

費目	予算	決算	備考
懇親会費	200,000	255,000	会員・非会員 5,000円×48名 学生 3,000×5名
合 計	200,000	255,000	

支出の部

費目	予算	決算	備考
懇親会費	200,000	255,000	
合 計	200,000	255,000	

差引残高

255,000-255,000=0

会計 森 由紀・十一 玲子

貸借対照表（平成24年3月31日現在）

科 目	当年度	前年度	増減
I 資産の部			
1. 流動資産			
手許現金	649	1,325	▲ 676
普通預金(三菱東京UFJ銀行国分寺支店)	283,709	233,286	50,423
通常貯金(ゆうちょ銀行)	0	21,701	▲ 21,701
振替口座(ゆうちょ銀行〇一九)	161,485	357,314	▲ 195,829
流動資産合計	445,843	613,626	▲ 167,783
2. 固定資産			
部会大会基金引当預金			
定期預金(三菱東京UFJ銀行国分寺支店)	2,000,000	2,500,000	▲ 500,000
通常貯金(ゆうちょ銀行)	0	0	0
固定資産合計	2,000,000	2,500,000	▲ 500,000
資産合計	2,445,843	3,113,626	▲ 667,783
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払い金	0	0	0
負債合計	0	0	0
III 正味財産の部			
正味財産			
1. 指定正味財産	0	0	0
2. 一般正味財産	2,445,843	3,113,626	▲ 667,783
負債及び正味財産合計	2,445,843	3,113,626	▲ 667,783

監 査 報 告 書

一般社団法人 日本家政学会
会 長 大竹 美登利 殿

私ども監事は、平成23年4月1日から平成24年3月31日までの平成23年度の部会の重要な会議に出席するほか、事業報告を開き、重要な書類を閲覧し、主要な調査を行い、かつ財務諸表及び収支計算書につき監査を実施した結果、次のとおり報告します。

1. 事業報告は規程に従い、部会の状況を正しく示しているものと認めます。
2. 財務諸表すなわち貸借対照表、正味財産増減計算書及び財産目録は平成23年度期末現在の財政状態を正しく示していると認めます。
3. 収支計算書は平成23年度の収支の状況を適正に表示していると認めます。
4. 理事の職務遂行に関する不正の行為または定款に違反する重大な事実はありません。

以上

平成24年 4月 23日

一般社団法人 日本家政学会
(被服構成学) 部会

監事 大村 知子 印

監事 猪又 美栄子 印

平成23年度 収支計算書(平成23年4月1日から平成24年3月31日まで)

科 目	予 算	決 算	備 考
I 事業活動収支の部			
1. 事業活動収入			
基本財産運用益	0	0	
受取会金	0	0	
受取会費	302,500	443,500	部会費177人分+過年度不足分
事業収入	450,000	579,500	
会誌購読料	0	0	
大会等参加費	450,000	579,500	夏期セミナー会費
広告料	0	0	
学会刊行物売上	0	0	
著者負担金	0	0	
受取補助金	0	0	
一般寄付金	0	0	
特別寄付金	0	0	
雑収入	3,000	436	利息
本部からの繰入金収入	0	0	
事業活動収入計	755,500	1,023,436	
2. 事業活動支出			
① 事業費支出			
東日本大震災関連費用	0	0	
大会等関連費用	0	0	
講演会等関連費用	905,000	939,743	夏期セミナー、研究例会
学会誌等関連費用	580,000	547,345	部会誌、作品集
研究発表要旨集関連費用	0	0	
研究補助費	0	0	
表彰費	20,000	8,911	ものづくりフェア部会長賞
関連学会費	10,000	10,000	ものづくりフェア協賛金
給料手当	0	0	
広報費	35,000	33,150	HP契約・維持管理
福利厚生費	0	0	
旅費交通費	50,000	11,540	
通信運搬費	40,000	13,080	
備品費	0	0	
消耗品費	5,000	1,031	
光熱水料費	0	0	
雑費	20,000	0	
総会費	3,000	1,980	
事務委託費	0	0	
租税公課	0	0	
地代	0	0	
会議費	130,000	117,856	
支払負担金	5,000	2,325	
印刷費	5,000	4,258	
贈謝金	0	0	
修繕費	0	0	
減価償却費	0	0	
リース料	0	0	
事務所管理費	0	0	
② 管理費支出			※法人会計の科目につき省略
事業活動支出計	1,808,000	1,691,219	
事業活動収支差額	-1,052,500	-667,783	
II 投資活動収支の部			
1. 投資活動収入	1,052,500	500,000	
2. 投資活動支出	0	0	
投資活動収支差額	1,052,500	500,000	
III 財務活動収支の部			
1. 財務活動収入	0	0	
2. 財務活動支出	0	0	
財務活動収支差額	0	0	
IV 予備費支出			
当期収支差額	0	▲ 167,783	
前期繰越収支差額	613,626	613,626	
次期繰越収支差額	613,626	445,843	

平成24年度 収支予算書（平成24年4月1日から平成25年3月31日まで）

科 目	24年度予算	23年度予算	増減(23-24年度)	備 考
I 事業活動収支の部				
1 事業活動収入				
基本財産運用益	0	0	0	
受取入金金	0	0	0	
受取会費	300,000	302,500	▲ 2,500	部会費2500×会員数131-名譽会員11
事業収入	400,000	450,000	▲ 50,000	夏期セミナー参加費+懇親会費
会誌購読料	0	0	0	
大会等参加費	400,000	450,000	▲ 50,000	
広告料	0	0	0	
学会刊行物売上	0	0	0	
著者負担金	0	0	0	
受取補助金	0	0	0	
一般寄付金	0	0	0	
特別寄付金	0	0	0	
雑収入	3,000	3,000	0	利息
本部からの繰入金収入	100,000	0	100,000	活動助成申請分
事業活動収入計	803,000	755,500	47,500	
2.事業活動支出				
①事業費支出				
東日本大震災関連費用	0	0	0	
大会等関連費用	3,000	3,000	0	総会運営費
講演会等関連費用	640,000	905,000	▲ 265,000	夏期セミナー、例会(運営費-会議費)
学会誌等関連費用	80,000	580,000	▲ 500,000	部会誌印刷費郵送料
研究発表要旨集関連費用	0	0	0	
研究補助費	0	0	0	
表彰費	20,000	20,000	0	モノづくりフェア 部会長賞
関連学会費	10,000	10,000	0	モノづくりフェア 協賛金
給料手当	0	0	0	
広報費	35,000	35,000	0	HP 契約、維持管理
福利厚生費	0	0	0	
旅費交通費	50,000	50,000	0	
通信運搬費	40,000	40,000	0	
備品費	0	0	0	
消耗品費	5,000	5,000	0	
光熱水料費	0	0	0	
雑費	20,000	20,000	0	
総会費	0	0	0	
事務委託費	0	0	0	
租税公課	0	0	0	
地代	0	0	0	
会議費	130,000	130,000	0	会議費
支払負担金	5,000	5,000	0	振込手数料
印刷費	5,000	5,000	0	総会運営費(資料代等)
諸謝金	0	0	0	
修繕費	0	0	0	
減価償却費	0	0	0	
リース料	0	0	0	
事務所管理費	0	0	0	
②管理費支出				※法人会計の科目につき省略
事業活動支出計	1,043,000	1,808,000	▲ 765,000	
事業活動収支差額	-240,000	-1,052,500	812,500	
II 投資活動収支の部				
1.投資活動収入	365,000	1,052,500	▲ 687,500	基金からの取り崩し
2.投資活動支出	0	0	0	
投資活動収支差額	365,000	1,052,500	▲ 687,500	
III 財務活動収支の部				
1.財務活動収入	0	0	0	
2.財務活動支出	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
IV 予備費支出				
当期収支差額	125,000	0	125,000	
前期繰越収支差額	445,843	613,626	▲ 167,783	
次期繰越収支差額	570,843	613,626	▲ 42,783	

お 知 ら せ

1. 会費納入について

平成 25 年度の被服構成学部会費 2500 円は、5 月中に下記郵便払込口座にご送金くださるよう、お願い申し上げます。また、過年度未納の方には別紙にてお知らせいたしましたので、併せてご送金ください。

郵便払い込み口座 00160-2-322300 日本家政学会被服構成学部会

なお、会費に関するお問い合わせは、下記にお願い致します。

〒173-8602 東京都板橋区加賀 1-18-1

東京家政大学 服飾美術学科 田中 早苗 宛

TEL・FAX 03-3961-9002

E-mail stanaka@tokyo-kasei.ac.jp

2. 入退会、住所変更等について

お届け、お問合せは下記までお願いいたします。

〒102-8357 東京都千代田区三番町 1 2 番地

大妻女子大学 短期大学部 家政科 土肥 麻佐子 宛

TEL・FAX 03-5275-6036

E-mail m-dohi@otsuma.ac.jp

※ 入会申込書および変更届、退会届の書式は最終ページをご参照下さい。

※ なお、退会届につきましては（社）日本家政学会の退会手続きとは別処理になっていますので、部会への手続きも併せてしていただきますようお願いいたします。

3. E-mail アドレスについて

E-mail アドレスの登録にご協力いただきありがとうございます。アドレスをお持ちの方でまだ登録いただいていない方は、平成 25 年度会費納入の際に振り込み用紙の通信欄にご記入いただければ幸いです。またアドレスの変更がある場合には、なるべくすみやかにお知らせくださいますようお願い申し上げます。

4. 平成24年度新入会員

新入会員は ありませんでした。

平成 25 年度 被服構成学部会夏期セミナー（案）

公開夏期セミナー「アパレルに生かす人体計測の取り組み」

期日：8月29日（木）・30日（金）

場所：倉敷ファッションセンター（倉敷市児島駅前1-46）

プログラム案

	8月29日（木）		8月30日（金）
12:30～	受付	9:00～	受付
13:00～13:10	開会の辞	9:30～10:10	部会員報告 「人体計測中間報告（仮題）」 日本女子大学 大塚美智子氏
13:10～14:10	講演1 「ISO/TC133 会議に関して（仮題）」 アパレル工業技術研究会 知久 幹夫 氏	10:20～11:00	講演3 「学校制服作りの現場から」 明石被服興業株式会社 児島 育子 氏
14:30～15:30	講演2 「我が国の人体計測の変遷と今後 （仮題）」 実践女子大学 高部 啓子 氏	11:10～12:10	講演4 「我が国のジーンズ製造の歴史 （仮題）」 ジーンズミュージアム 名誉館長 柏野 静夫 氏
15:50～17:20	計測実習 静岡大学名誉教授 大村 知子 氏		
18:00～19:30	懇親会	12:10～13:00	昼食
		13:00～15:00	見学会 ジーンズミュージアム ベティスミス

※詳細が決まり次第ご案内いたします。

連絡先：甲南女子大学 森 由紀 E-mail moriyuki@konan-wu.ac.jp

一般社団法人日本家政学会被服構成学部会規約

第1条（名 称） 本会は、一般社団法人日本家政学会被服構成学部会と称する。

第2条（目 的） 本会は、会員相互の研究に関する連絡及び協力をはかり、被服構成学に関する教育・研究を促進することを目的とする。

第3条（事 業） 本会は、前述の目的を達成するため次の事業を行う。

- 1 総会を開催する。
- 2 被服構成学に関する研究・討議・講演などを行う。
- 3 部会誌を発行する。
- 4 その他の必要な事業を行う。

第4条（会 員） 本会の会員は、次のとおりとする。

- 1 正会員 被服構成学及びこれに関係する分野を研究する一般社団法人日本家政学会会員で、本部会の目的に賛同して入会した個人。
- 2 名誉会員 元部会長、または、特に部会の発展に寄与した会員で、70歳を越えた場合に、運営委員会の議決をもって推薦された者。

第5条（入 会） 本会に入会を希望する者は、所定の入会申込書を部会長に提出し、運営委員会の承認を得るものとする。

第6条（退 会） 会員が退会しようとするときは、その旨を部会長に届け出るものとする。
この場合、既納の会費は返却しない。

第7条（役 員） 本会に次の役員をおく。

- 部会長 1名
- 副部会長 2名
- 運営委員 若干名
- 監 事 2名

第8条（役員の選任） 役員の選任は、次のとおりとする。

- 1 部会長及び監事は、運営委員会がこれを推薦して、総会で選任する。部会長の選任および解任は、理事会の承認を受けるものとする。
- 2 副部会長及び運営委員は、部会長がこれを推薦し、会員に報告する。

第9条（役員の任期）

- 1 役員の任期は2年とし、再任を妨げない。
- 2 役員の再任については、申し合わせを別に定める。

第10条（役員の職務） 役員の職務は次のとおりとする。

- 1 部会長は部会を代表して会務を統轄し、事業計画および予算、事業報告および決算を毎事業年度、理事会に報告する。
- 2 副部会長は部会長を補佐し、必要な場合には部会長の職務を代行する。
- 3 運営委員会は本会の業務を運営する。
- 4 監事は本会の会計監査を行う。

第11条（役員の解任） 役員が次の各号の一に該当するときは、解任を運営委員会で動議し、総会で決議する。

1 心身の故障のため職務の執行に堪えないと認められるとき。

2 職務上の義務の違反、その他役員たるにふさわしくない行為があると認められたとき。

第12条（会計） 本会の会計は次のとおりとする。

1 経費は正会員の会費、その他をもってまかなう。

2 会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月末日に終了する。

第13条（規約の改廃） 本規約の改廃は総会において承認を受け、理事会に報告する。

以上

附 則

1 施行に関する内規は別に定めることができる。

2 この会則の施行は昭和54年10月8日からとする。

3 この会則の一部改正の施行は昭和59年8月3日からとする。

4 この会則の一部改正の施行は昭和63年8月1日からとする。

5 社団法人日本家政学会部会規定に基づき、平成15年8月27日から被服構成学部会会則を廃止し、社団法人日本家政学会被服構成学部会規約とする。

6 この規約の施行は平成15年8月27日からとする。

7 社団法人日本家政学会部会規定に基づき、平成18年8月22日から被服構成学部会規約を廃止し、社団法人日本家政学会被服構成学部会会則とする。

8 この会則の施行は平成18年8月22日からとする。

9 社団法人日本家政学会部会運営規程および部会運営規程細則に基づき、平成22年5月29日から被服構成学部会会則を廃止し、社団法人日本家政学会被服構成学部会規約とする。

10 この規約の一部改正の施行は平成22年5月29日からとする。

11 この規約の一部改正施行は平成24年5月12日からとする。

一般社団法人日本家政学会被服構成学部会申し合わせ

- 1 運営委員会 運営委員会は、部会長、副部会長、運営委員、監事で構成し、その中に庶務、会計、企画、広報、編集担当をおく。
- 2 役員の任期 (1) 規約第9条に従って部会長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、継続して3期はつとめられない。
(2) 運営委員の任期はできるだけ2期4年間とし、その交代は半数ずつ交互に行うことが望ましい。期間をあけての再任は、これを妨げない。
- 3 運営委員の選任 運営委員の選任にあたっては、できるだけ部会員が在住する広範な地区から選ぶように配慮する。
- 4 事務局幹事 (1) 必要に応じて事務局幹事をおくことができる。
(2) 事務局幹事は若干名とし、部会長がこれを指名する。
(3) 事務局幹事は役員会に同席することができるが、議決権は持たない。
- 5 事務局 事務局は、原則として部会長のもとにおく。
- 6 申し合わせの改廃 運営委員会の議を経て、総会で承認し、理事会に報告する。

附則

- 1 この申し合わせは、平成15年8月27日から施行する。
- 2 この申し合わせの一部改正施行は、平成18年8月22日からとする。
- 3 この申し合わせの一部改正施行は、平成24年5月12日からとする。

平成 24・25 年度役員

部会長	鳴海多恵子	東京学芸大学
副部会長	大塚美智子	日本女子大学
	森 由紀	甲南女子大学

運営委員

(庶務)	土肥麻佐子	大妻女子大学短期大学部
	原田 妙子	名古屋女子大学短期大学部
	石垣 理子	昭和女子大学
(会計)	服部由美子	福井大学
	田中 早苗	東京家政大学
	中村 邦子	大妻女子大学短期大学部
(企画)	増田 智恵	三重大学
	川端 博子	埼玉大学
	小山 京子	美作大学
(広報)	雙田 珠己	熊本大学
	薩本 弥生	横浜国立大学
(編集)	渡邊 敬子	京都女子大学
	鈴木 明子	広島大学
(監事)	大村 知子	静岡大学名誉教授
	布施谷節子	和洋女子大学

事務局 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町 4-1-1

東京学芸大学 生活科学講座

TEL 042-329-7439 (ダイヤルイン)

FAX 042-329-7439

E-mail narumi@u-gakugei.ac.jp

(社)日本家政学会 被服構成学部会入会申込書および変更届, 退会届

入会 変更 退会 (いずれかを○で囲む)	申込年月日 年 月 日		受付年月日 年 月 日	
	ローマ字			
	氏名	氏	名	
	西暦 19 年生		性別	男・女 (どちらかを○で囲む)
家政学会所属支部				
自宅住所	〒(-)			
	TEL		FAX	
	E-mail			
勤務先・職名 および所在地	勤務先		職名	
	〒(-)			
	TEL		FAX	
	E-mail			
専門分野	<研究分野> <担当授業科目>			
最終学歴				
学位				
部会誌送付先	自宅・勤務先 (どちらかを○で囲む)			

太線枠内は必ず記入してください。細線枠内は差支えない範囲でお書きください。

退会の場合は、今後、連絡する必要がある場合に備えて、連絡がつく自宅か勤務先の情報をご記入ください。

お届けは「お知らせ」ページの宛先まで、添付メールまたは郵送にてご提出下さい。

部会費は「お知らせ」ページの口座にご送金ください。

* 個人情報保護には十分に注意をいたします。

なお、書式を被服構成学部会ホームページからダウンロードしてお使いいただくこともできます。

URL: <http://h-kohsei.com>

編集後記

原稿執筆などご協力をいただいた皆様に感謝申し上げます。特に、今回は岡部和代先生に「人体と衣服の形態計測もやま話」と題して、われわれ後進のために先生のご研究の成果をまとめていただきました。先輩の成し遂げられたことを踏まえ、さらに被服構成学の分野がますます発展することを期待しています。（渡邊）

部会誌の編集及び執筆にご協力いただいた先生方に心よりお礼申し上げます。今回の編集作業は全面的に渡邊先生がご尽力下さいました。若干のお手伝いの中で、改めて多くの先生方が素晴らしい研究や教育活動に取り組んでおられること、また多様な研究課題を包含する被服構成学研究の魅力を感じました。当該分野の研究の発展を期して、来年度の編集作業に取り組みたいです。（鈴木）